博物館調査研究レポート

2019 年レポート「ICOM 京都大会 2019 開催」

京都外国語大学・国際文化資料館館長　南　博史

開催に向けての経緯：

ICOM(世界博物館会議)の第 25 回目の大会が、2019 年 9 月 1 日～7 日に京都で開催されました。国際文化資料館は 2013 年に ICOM に入会し、UMAC（大学博物館とコレクション国際委員会）に加わり ICOM-UMAC 活動を開始しました。

その理由は、「言語を通して世界の平和を」理念とする本学の博物館として、世界平和に貢献することは ICOM の理念や UMAC の役割と合致すると考えたからです。また、ICOM では博物館が積極的に社会課題の解決に取り組んでいく役割があるとしています。国際文化資料館では 2011 年以来、学芸員資格課程と協働し、地域課題の解決に向けた外部連携活動、フィールドワークを開始しており、こうした活動を通して、大学の理念、そして平和に貢献できる人材を育成する本学を広く世界に発信できる絶好の機会と捉えました。

2013 年、ICOM 大会の日本招致に向けて準備を開始されていた日本博物館協会の半田昌之専務理事からのお誘いもあって、「第 23 回 ICOM リオデジャネイロ大会」にはじめて参加しました。続いて、UMAC メンバーとしても 2014 年、「アレクサンドリア 2014 年 ICOM-UMAC 年次大会」でポスター発表を行い、「京都・大学ミュージアム連携」の活動を紹介しました。

これを受けて ICOM 日本大会招致活動をされていた京都国立博物館の栗原副館長から UMAC のボードメンバーの京都招聘について「京都・大学ミュージアム連携」の協力を求められました。そして、2015 年 5 月 18 日、UMAC マニラ年次大会後のツアーとして、UMAC Kyoto Meeting & Tour を行いました（**https://univ-museum-kyoto.com/bureau-topics/umac-kyoto-meeting-tour/**）。

2015 年 6 月 2 日～3 日の ICOM パリ総会にて 2019 年京都への大会招致が決定しました。2016 年の「第 24 回 ICOM2016 年ミラノ大会」は、京都大会に向けた調査になりました。とくに招致委員会からはボランティアチームへの支援を依頼されたこともあって、ミラノ大会でのボランティアの役割や動きは大変参考になりました。

2019 年に向けた「2017 年 UMAC ヘルシンキ第 17 回年次大会」、「2018 年 UMAC マイアミ第 18 回年次大会」は、京都大会への多くの参加を呼びかける場となった。そして、マイアミ年次大会終了後、2019 年京都大会での UMAC 体制やテーマなどの打ち合わせが行われました。

なお、各年次の活動詳細は、資料館 HP の ICOM-UMAC 年次レポートを参照してください。

第 25 回 ICOM(国際博物館会議)京都大会 2019：

2019 年 9 月 1 日～7 日、第 25 回 ICOM 京都大会が京都・国立京都国際会館を中心会場に開催されました。日本では初開催です。120 の国と地域から 4590 名の参加者がありました。これは過去最多の参加者数です。**写真 1、写真 2**

日本博物館協会によれば、「日本からの参加者も 1866 名、そのうち 100 名以上が各国際委員会で講演や発表を行うなど、日本博物館史上最大規模の国際会議」とのことです。

以下、日本博物館協会の報告書などから抜粋し、まとめます。

(c) Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto Junior College of Foreign Languages All rights reserved. https://www.kufs.ac.jp/

大会の概要：
京都大会のテーマ「Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition（文化をつなぐミュージアム ー伝統を未来へー)」に沿って、3 名の基調講演と 4 つのプレナリーセッション（全体会合)、30 の国際委員会等のセッションが行われました。また、国際委員会ごとのオフサイトミーティングや、京都府市を中心に関西エリアへ出向き地域の文化や歴史に触れるエクスカーション、ソーシャルイベントなども開催されました。

ICOM 規約に定める博物館の定義：
ICOM 京都大会で採決される予定であった ICOM 規約に定める博物館の定義の見直しは見送られましたが、ICOM 日本委員会が提案した「ICOM コミュニティへのアジアの融合」と「『文化をつなぐミュージアム』の理念の徹底」の 2 つが大会決議として採択されました。

博物館災害対策国際委員会発足：
新たに 31 番目の国際委員会となる博物館災害対策国際委員会（DRMC: International Committee for Disaster Resilient Museums)が発足し、日本の活躍が期待されています。
※引用：https://icomjapan.org/icom-kyoto-2019/
＊＊＊＊

UMAC（大学博物館とコレクション国際委員会）と国際文化資料館の活動：
開催期間中、UMAC 委員長ポルトガル・リスボン大学の Marta Lourenço 先生と、ボードメンバーの ICU 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館の福野明子先生を中心に、UMAC 京都大会現地運営委員の国際文化資料館館長南が資料館の職員、博物館学芸員課程学生の協力を得て UMAC の運営をサポートしました。一方、京都・大学ミュージアム連携に対しても引き続き UMAC 大会へ協力依頼があり、関連イベントの展示ブースに京都・大学ミュージアム連携のブースを設けて参加者と英語、スペイン語（本学学生、院生）で交流しました。**写真 3**

とくに 9 月 5 日のオフサイトミーティングでは、本学の施設が中心となって行われました。以下は資料館ブログに掲載した報告(一部、改変)です。
＊＊＊＊
オフサイトミーティングは、熊谷俊樹副学長（元）の開会あいさつのあと、京都外国語大学 1 号館 171 教室で開催され、「日本における大学博物館と収蔵品の未来」と題して 2 部構成で発表が行われました。会場には 100 名を超える参加者があり、発表の後は本学で開催した「ラテンアメリカの古代美術展」（於：国際文化資料館）と第 11 回京の匠展「文化財ドック in 京都外大～匠のわざと社寺建築～」（9 号館前、9 号館 6 階、7 階）を見学いただきました。**写真 4、写真 5**
また、その後は京都・大学ミュージアム連携の博物館見学バスツアーに向かいました。バスツアーでは、京都大学総合博物館の ICOM 京都大会関連特別展「洛中洛外図屏風を愉しむ-海外資料に親しむ方法の開発-」見学にあわせて収蔵庫を特別に見学できました。続いて、京都工芸繊維大学美術工芸資料館でも「図案家の登場-近代京都と染織図案Ⅲ」の見学にあわせて図書館収蔵庫なども見学させていただきました。

＊＊＊＊
このうちもっとも参加者にアピールできたのは、外部連携パートナーである「文友会」（詳細は資料館 HP 参照）

(c) Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto Junior College of Foreign Languages All rights reserved. https://www.kufs.ac.jp/

と協働して実施した京の匠展「文化財ドック in 京都外大～匠のわざと社寺建築～」でした。毎回恒例の「匠のわざ体験コーナー」は、大学本部構内の 9 号館 6 階ではうちわ彩色体験、錺金具の体験、しおり作り、7 階では畳縁付け、かわら粘土を、9 号館入口前ではかんな削り、こけら葺き、檜皮葺きを日替わりで体験して頂きました。また、開催初日の 9 月 3 日には、講師に宇佐美直八文友会会長、後藤由美子（公財）京都古文化保存協会常務理事に登壇いただき、国際文化資料館第 15 回公開講座「文化財を護るためには何が必要か」を行いました。

とくに 9 月 5 日のオフサイトミーティング当日、9 号館前でおこなったカンナ体験では、多くの参加者が自身で削ったカンナくずの香りを楽しみ、大事そうに持ってしまわれたのが印象的でした。展示を通して、日本の社寺建築の保存や修復にかかる匠の方々の技と心に触れていただけたと思います。**写真 6**

また、リニューアルとなった資料館で開催した「ラテンアメリカの古代美術展」は、新しく設けた 3 階の展示室には寄贈いただいたいけばな小原流小原豊雲コレクションを展示しました。とくに貴重な染織品は参加者の目を引いたようです。なお、今回の ICOM- UMAC 大会開催に係る報告書の表紙には、この古代アンデスの土器が使われています。

参考：UNIVERSITY MUSEUMS AND COLLECTIONS JOURNAL, VOL.11, No.1, 2019

以下、ICOM ジャーナル Journal April 1, 2020 に掲載された福野先生のレポートから一部を抜粋して紹介します。

＊＊＊＊

[京都大会での委員会テーマ]

University Museums and Collections as Cultural Hubs: The Future of Tradition

文化をつなぐ大学博物館とコレクション－伝統を未来へ

[開催日程]

8.31　@京都外国語大学：UMAC 理事会

9.1　@京都国立博物館：3 つのワークショップ

9.2　@国立京都国際会館

オープニングセッション～研究発表セッション 2

9.3　@国立京都国際会館

研究発表セッション 3 (ICTOP との合同セッション)～セッション 4；総会

9.4　@稲盛記念会館：研究発表セッション 5～セッション 13

9.5　@京都外国語大学

オフサイトミーティング、研究発表セッション 14～セッション 15 および京都市内の大学博物館へのバスツアー

9.9-10 日　@東京、慶應大学アート・センター

ポストカンファレンスセミナー「文化コモンズとしての大学ミュージアム：ミュージアムにおける領域横断型研究・教育」University Museums as Cultural Commons: Interdisciplinary Research and Education in Museums

＊＊＊＊

また、報告の[京都大会概要及び所見]の中で、京都外国語大学で開催したオフサイトミーティングの記述があるので抜粋します。また、[今後の展望]には、今後の本学の大学博物館における ICOM－UMAC 活動の方向性を考えるうえで参考になると思います。

(c) Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto Junior College of Foreign Languages All rights reserved. https://www.kufs.ac.jp/

[京都大会概要及び所見]

1)内容

一部省略

9 月 5 日はオフサイト会場となった京都外国語大学にて、日本の大学博物館に特化したセッションを組み、オープン・セッションとして 100 人を超える参加者を集めた。基調講演は京都工芸繊維大学美術工芸資料館館長並木誠士教授による「〈京都・大学ミュージアム連携〉と「〈京都・大学ミュージアム連携+〉－大学ミュージアムの可能性」。引き続き 2 つのセッション、「大学は博物館の試み：パブリック・アクセス」と「大学博物館の試み：資源の活用と協働」が行われ、日本から 7 つの大学博物館による取り組みが紹介された。プログラムの後半は、リニューアルした京都外国語大学国際文化資料館の見学、事前申込者 50 人限定の京都大学総合博物館と京都工芸繊維大学美術工芸資料館の見学およびバックヤードツアー。海外からの参加者にとって、日本の大学博物館からの発表は興味深く、自国の課題と重なる部分も多かったと思われる。収蔵庫見学においては日本特有の博物館資料の収蔵方法の見学が可能となったことも有意義であった。

2) 京都大会の評価と課題

省略

3)今後の展望

UMAC としては、より多くの日本の大学博物館関係者が UMAC や ICOM 大会に参加することに期待したい。国内には国立系の「大学博物館等協議会」、関西においては「京都大学ミュージアム連携」や「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」が存在するが、横のつながりが希薄である。これらのネットワークをつなぎ、国際的な場でのプレゼンスも必要である。UMAC AWARD（毎年、外部の評価委員会が、大学博物館とコレクションの世界的に優れた活動や改革を称え、授与している賞）への応募、UMAC のグローバルなデータベースへの参加を促したい。日本国内の大学博物館が連携を強め、さらに世界中の大学博物館とつながることができれば望外の喜びである。

※引用：UMAC（大学博物館とコレクションの国際委員会）at ICOM Kyoto 2019 | ICOM 日本委員会 (icomjapan.org)

＊＊＊＊

最後に：

今回の大会開催について、本学からは公式的に協力をいただきました。

これは、大会開催委員長の京都国立博物館佐々木館長先生から、本学の森田嘉一理事長総長先生(当時、現学園最高顧問)、松田武学長先生に学生ボランティアの協力を求められたことにはじまります。本学の学生諸君が、世界から集まってくる博物館関係者のお手伝いをしている姿をみて大変誇らしく感じました。あらためて深く感謝申し上げます。

大会に先立つ 2 年前から ICOM 京都 2019 大会の関連記念イベントとして、ICOM 京都大会 2019 記念国際シンポジウム「中米地域社会と博物館」Ⅰ（2018 年）・Ⅱ（2019 年）を開催しました。この開催趣旨の中では、

「各国の博物館関係者と交流し、中米の博物館研究、博物館活動を広く世界に紹介するとともに、それぞれの国の博物館運営の一助になることを期待しています。

ICOM 京都大会を契機として、京都外国語大学が中米の博物館と世界の博物館の仲介者として積極的に活動することで、長く継続してきた本学と中米諸国の交流関係をさらに未来に発展させることができると確信しています。

そして、こうした機会に本学の学芸員資格課程履修生だけではなく、広く学生が参加することによって、博物館

(c) Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto Junior College of Foreign Languages All rights reserved. https://www.kufs.ac.jp/

を通した世界の平和に貢献できる人材の育成につなげていていきたいと思います。」と結びました。

これは諸先輩、諸先生方が長く好を繋いでこられた本学とラテンアメリカ諸国との友好交流があったからであることをあらためて明記します。

2020 年から世界的感染が拡大した新型コロナウイルスによる今までの生活のあり方、社会の変化は、国同士、地域同士から個人にまで及んでいます。こうした課題に国際文化資料館がどのように答えていけるのか全く見えていないのが現状ですが、「博物館を通して世界平和を目指す」大学博物館として、挑戦し続けていきたいと思います。

最後になりましたが、今回の ICOM-UMAC 大会開催については、大学内外の多くの方々の協力を得ました。ひとりひとりお名前を挙げることできず申し訳ありませんが、皆様方のご理解とご協力に心より感謝申し上げる次第です。

（文責：南博史）



写真１　本会議場



写真２　大混雑の受付



写真３　京都大学ミュージアム連携ブースにて
右から、京都大学総合博物館長岩﨑奈緒子氏（当時）、京都・大学ミュージアム連携委員長並木誠士氏（当時）、京都外国語大学院生植村まどか（当時）、京都外国語大学生石山和佳・宮田怜奈（当時）、京都外国語大学院生深谷岬（当時）、手前が執筆者



写真４　熊谷前副学長とマルタ UMAC 委員長

(c) Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto Junior College of Foreign Languages All rights reserved. https://www.kufs.ac.jp/



写真５　オフサイトミーティング会場



写真６　カンナ体験を終えて

(c) Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto Junior College of Foreign Languages All rights reserved. https://www.kufs.ac.jp/